

三島由紀夫と古典歌謡

植 木 朝 子

この頃、催馬楽その他の歌謡が大へん面白く、二、三御紹介しますと（尤もこれは私の好きなもので、世間でどういふ価値が与へられてゐるか知りません。）——

今様（梁塵口伝集）

松のこかげに立ちよれば

千とせの緑は身にしめども

松が枝かざしにさしつれば

春の雪こそ降りか、れ（松の木陰）だの

神楽歌

（本） 少童わかももを、早稲田にやりてや

其そを思ふと、そをもふと、そをもふと、そをもふと、そをもふと、

そをもふと、

『新潮』第一〇四卷第一号（二〇〇七年一月）に東文彦（本名・東健）宛十二通の新出書簡が紹介された。東文彦は三島にとつて五歳年上の学習院の先輩であり、二人の文通は昭和十五年から昭和十八年、東が二十三歳で早逝するまで続いた。稿者は以前、書簡と初期作品から、従来あまり注目されてこなかった三島由紀夫の古典歌謡に対する関心について考えたことがある（『中世小歌 愛の諸相』第Ⅱ部「中世歌謡と近現代の作家たち」第3章「三島由紀夫—書簡と初期作品から—」（森話社 二〇〇四年）、以下前稿とする）が、新出書簡の中には、若き日の三島の古典歌謡愛好をさらに鮮明に示すものが含まれる。本稿では、古典歌謡にふれた新出書簡二通を取り上げて、前稿の補足としたい。

①昭和十七年十月五日付書簡より

(末) そをもふと、何もせずしてヤ

春日すら、春日すら、春日すら、春日すら、春日すら、

(総角)

夕暮の薄がすみ、誰がならず糸竹、おもひある身にはたゞ、よそのしらべもなつかし。

其四、

(これは小泉八雲もそのリフレインの哀切な趣を激賞してゐますし、この間も藤田徳太郎がほめてゐました。) だの、

梅つぼのあたりより、小簾のひまに洩れくる、風のかをりは宵の間の、闇はいとゞあやなし。

催馬楽

其五、

一段

竹河の、橋のつめなるや、橋のつめなる、花園に、ハレ

弘徽殿のほそどのに、たゞずむはたれく、おぼろづきよの内侍の督、光る源氏の大将。

二段

其六、

花ぞのに、我をば放てや、童女たぐへて(竹河) だの
今度はずつと下つて近世の琴歌に、王朝の幻をみました。

いとゞなほ深き夜の、あはれを知るも入る月の、おぼろげならぬ契りこそ、今身に思ひ知らるれ。

*

「花の宴」

其一

幾春もこ、になほ、御階の桜、色増され、雲井の花はひさかたの、
そらふく風もおよばじ。

其二、

雲の上人挿頭して、色をあらそふ紫の、袖のかをりは打ちゆる、
大内山の夕づく日。

其三、

宛然王朝風の長篇小説をおもはせるではありませんか。浪漫派の伊藤佐喜雄といふ人に「花の宴」といふ長篇がありますが、「花の宴」といふ王朝詩情の極致を示すやうな象徴的なことはを、あれだけ龐大な紙数でも表現し得ず、近世の濁世にうまれた琴歌のほんの十行ほどにもかなはないといふのはおそろしいやうな気がします。

それだけ現代といふものは悪時代であつたのでせう。^①

本書簡で、三島は古代および近世の歌謡に強い関心を寄せている

ことを自ら表明している。これに先立つ昭和十七年八月二十八日付清水文雄宛書簡に、三島は、

「『文芸文化』まことにありがたうございました。さつそく拝見させていたゞきました。巻頭の催馬楽のうた、十二月八日をうたつた詩のなかに一つでもこんなものがあつたら、とおもひました。」^②

と記しており、すでに催馬楽への関心が窺われるが、ここで触れられている「巻頭の催馬楽」とは、『文芸文化』第五卷第九号・通巻第五十一号（昭和十七年九月）の扉部分に記された「あな尊」である（前稿に既述）。『文芸文化』は、学習院の講師嘱託であった清水文雄が、昭和十三年七月、蓮田善明・栗山理一・池田勉らと創刊した同人誌であり、やがて三島由紀夫も同誌に作品を発表することになる。はじめて掲載されたのは、「花ざかりの森」の連載第一回、第四卷第九号・通巻第三十九号（昭和十六年九月）であった。

具体例の最初に引用された今様は、後に『文芸文化』第六卷第一号・通巻第五十五号（昭和十八年一月）に載る「寿」と題された隨筆の冒頭にも引かれている（脱稿は昭和十七年十一月十八日）。そこで、三島は当該今様を「折にふれて私の口をついて出るこの類ひなく好もしいうた」とし、「並びなかつたのしい世界」が出現していると評価している（前稿に既述）が、本書簡も、三島の当該今様愛

好を伝える一材料として付け加えることができよう。

次に引用された神楽歌について、三島は、小泉八雲と藤田徳太郎の評価を注記しているが、八雲の著述の該当箇所は、『影』所収「日本の古い歌」の、以下に引用する部分であると思われる。

次記の古歌では、言ひ終へて居ない句の異常な反覆と、二重の中絶とで、前のよりも尚ほ一層著しい効果を得て居る。自分はいかほど純然と自然なものは想像が出来ぬ。実に此の単純な発言の写実は殆ど哀切の性質を有つて居る。

この後に神楽歌「総角」が「総角（古い叙情劇詩——年代不明）」として、引かれている。なお、引用文中の「前の」は神楽歌「磯等」（いそらが崎に 鯛釣る海士も 鯛釣る海士も 我妹子がためと 鯛釣る海士も 鯛釣る海士も）^③を指す。

引用は『小泉八雲全集 第六卷』（第一書房 一九二六年）によつた。「日本の古い歌」の訳者は大谷正信。同書の田部隆次の解説によれば、『影』は一九〇〇年、ボストンのリッツル・ブラウン会社及びロンドンのサムスン・ロウ会社から出版された。以前に発表されたものは一編もないとのことである。三島由紀夫は、本書簡の引用箇所より前の部分で、

ちかごろ有楽町の第一書房へゆき面白い本をみつめました。小泉八雲全集二冊と、「吉野朝の悲歌」と、「かなしき女王」とか

つてまゐりましたが、この「かなしき女王」といふのが希代の掘りだしものです。

と述べている。あるいはこの「小泉八雲全集二冊」に、「日本の古い歌」が含まれていて、書簡を認める前に読んだばかりであった可能性も考えられようか。

藤田徳太郎の当該の神楽歌に関する発言として、管見に入ったのは、次のようなものである。

女の純情を示す歌も、この民謡風の歌（＝神楽、催馬楽、風俗歌などを指す・植木注）の中には多いのです。

本総角を、早稲田にやりて、そを思ふと、そを思ふと、そを思ふと、そを思ふと、

末そを思ふと、何もせずして、春日すら、春日すら、春日すら、春日すら、春日すら

これは神楽の、小前張の中の、「総角」といふ歌ですが、総角といふのは、成年少し前の少年のことで、髪形が童形であるところから来た名ですが、この総角の髪を元服すると、一人前の大人になるわけです。これは男女ともに通じていはれることですが、こゝは男の子でせう。若い男を田にやつて、家を守つてゐる少女が、長い春の日さへ、一日中何もせず、その男のことを思つてゐたといふ歌で、「早稲田」といふところに、民

謡的な農村、田園の情趣を感じさせますが、そこで、一むきに純情な思慕の情を歌つてゐるのが、この歌であります。「そを思ふと」といふ同じ言葉が五度繰り返されてゐるのは、かういふ歌謡に多い、繰り返しの現象に過ぎないのですが、それでも内容的に非常に思ひの深いことを歌ひ現はしたやうな感じさへ与へられます。

引用は、藤田徳太郎著『平安時代の庶民文学』（日本放送出版協会 一九三九年）によつた。はしがきによれば、本書は、昭和十四年十月十六日、十八日、二十日の三日間に放送された内容を基に、それを「詳細に書き改め」て一冊の新書にしたものである。三島の書簡には、藤田徳太郎が「この間も」ほめていた、とあり、昭和十四年発行の書物を「この間」とするのはいささか不自然である。従つて三島のいう藤田の「総角」賞賛は、直接本書を指すものではないが、当該神楽歌に熱烈で純情な感情の横溢を見、それを評価するといふ同趣旨の発言がこの書簡の直前にもなされていたのではないかと推測される（朝日新聞、読売新聞のデータベース検索によつては、該当するような記事を見つけることはできず、また、『近代歌謡の研究』（勉誠社 一九八六年）付載の目録によつて調査した限りでは、藤田の論文や著書にもそれらしきものを見つけることができなかった）。

本書簡最後の引用は、箏組歌「花の宴」である。『箏曲大意抄』に裏組新曲として載る。^④近世歌謡の伴奏楽器として特に重要なものに、三味線と箏があるが、三味線組歌が当世風の俗なる詞章を多く含むのに対し、箏組歌は王朝の和歌や物語に典拠を持つ雅な詞章を持つ。三島が琴歌に「王朝の幻をみ」たと述べているのも首肯できるところである。箏組歌「花の宴」其五は、明らかに『源氏物語』花宴巻に描かれた、弘徽殿の細殿における朧月夜と光源氏の出会いの場面を踏まえているが、その他の曲も、『源氏物語』花宴巻とゆるやかな対応関係を持っているように思われる。すなわち其一、其二には、「南殿の桜の宴」^⑤の晴れやかさが響いており、其二には、光源氏が春宮から挿頭の花を下賜されて、しきりに舞を所望され、「のどかに袖返すところを一折れ、けしきばかり舞」った場面が投影されているとも見られる。其三・其四には、藤壺に近づきたい一心で、夜がふけてから、その居所のあたりをさまよう源氏の姿を重ねて読むことが可能であろう。源氏が目指すのは藤壺（飛香舎）であって梅壺（凝華舎）ではないが、其四は、「春の夜の闇はあやなし梅花色こそ見えね香やはかくる」^⑥（『古今和歌集』巻一・春歌上・凡河内躬恒）の和歌を踏まえており、其三で歌われる美しい音楽と其四で歌われる芳しい香りは、優美な女性の住まいを描写する王朝物語の常套表現といつてよく、男女の出会い（其五）の前に置

かれる内容としてふさわしい。其六は、名前も聞かぬままにあわただしく別れた光源氏と朧月夜が再会する場面を連想させる。花宴巻末で、ようやく朧月夜を探し当てた光源氏は、「梓弓いるさの山にまどふ哉ほのみし月のかげや見ゆると」と和歌を詠みかける。源氏は、先日のはかない逢瀬で契つた女君を「ほのみし月」とたとえたが、琴歌は、それを踏まえ、再会した今「おぼろげならぬ契り」と知った、という趣で組み立てられていると考えられよう。

この箏組歌に対して、やや批判的に取り上げられている伊藤佐喜雄の『花の宴』は、『日本浪漫派』第一巻第九号（昭和十年十二月）〈第三巻第二号（昭和十二年三月）に連載された長編小説で、昭和十四年に新ぐるりあ叢書として、ぐるりあ・そさえてから刊行された。精神科医学士でキリスト教徒の高原一郎、屋代伯爵家の後嗣・利明少年の家庭教師をつとめる理想主義者ともいえる酒井宏介を中心に、身もち崩し、モルヒネ中毒となつて施療院で死んでいく高原の友人・加島進、労働者あがりの左翼運動家・宇佐美武、高原に惹かれながら、宇佐美のもとに走つて警察に逮捕されることになる酒井の妹・静江、屋代利明の姉で酒井に恋をする悠紀子、何くれとなく酒井の世話を焼く商業学校の教師・松尾忠平、貴族出身で悠紀子に思いを寄せる、やや軽薄な青年・瀧修造、瀧の父の愛人の娘であり、酒井を慕う芳野房代など多彩な若い男女が登場する。信仰の

問題と左翼運動の問題をからめながら、彼らの恋の試行錯誤や、夢のはかなさ、現実の厳しさに対する苦悩など、一九三〇年代の若者の青春をつづっている。やがて、酒井静江と心を通わせながらも、牧師として独身を通そうとする気持ちも捨てきれないでいた高原が、苦しんだあげく静江に絶縁状を送ったのに、すぐに資本家令嬢と結婚し、西洋に留学するという意外な終幕をむかえ、現実的な結末のはかなさも漂う。一方の酒井は、静江に金を与えたために警察に逮捕され、おそらくは拷問のためか（検閲を恐れたためかはつきりと描かれない）、精神を病む。高原の尽力と芳野房代の献身的な看病によって、奇跡的に回復するが、今や友人高原は、まったく異なった世界に生きる人になってしまったのであった。

三島はこの小説について「花の宴」といふ王朝詩情の極致を示すやうな象徴的なことばを、あれだけ膨大な紙数でも表現し得ず」としているが、伊藤佐喜雄が『花の宴』に描こうとしたのは、王朝的詩情ではなく、あくまでも一九三〇年代の青春群像であったと思われるから、三島の批判は正鵠を射たものとは言いにくい。なお、小説中で「花の宴」という表現が見えるのは、酒井の家がかつて屋代公に仕えた由緒ある家で、毎年屋敷の庭で「花見の宴」が開かれていたということを、祖母の語ったこととしてわずかに触れる一箇所のみであった。「花の宴」の題名はこの箇所を直接受けるのでは

なく、むしろ、様々な若者の青春時代を、華やかで美しく、そしてどこかものうく感傷的な「花の宴」にたとえたのであろう。花は必ず散るものであり、そのような花と重なる人生のはかなさへの哀感が、この小説の底に流れていると思われるからである。

以上のように、三島の伊藤批判は、いささか強すぎるようにも思われるが、近世の琴歌への評価がそれだけ高かったということを示している。

後の、昭和十八年一月二十四付東文彦宛書簡には、「春の狐」と題された詩が同封されており、三島自身が「催馬楽の間拍子と、近世の唄の調子をいれてみました」と注している（前稿に既述）が、こうした作品創作にも影響を与えた、古典歌謡愛好の様子を伝えるものとして本書簡は興味深い。

②昭和十七年十一月二十七日付書簡より

御手紙ありがたう存じました。又「梁塵秘抄」ながくありがとうございました。別便にてお返し申上げます。（中略）

「われをたのめて来ぬ男」の奇抜な歌はなるほど仰言るとほり卓れたユウモアを含んだ佳作と存じ、早速ノオトにとらしていたゞきました。これはもしかしたら足の冷えるのにいつも悩んでゐる女であつたかもしれぬなど、想像するとなほ愉快になります。男への呪

詛が一さう実感として浮き出てきます。

すでに紹介されていた東文彦宛書簡で、三島は『梁塵秘抄』を貸してほしいと依頼している。前稿と重複するが、該当書簡を次に掲出する。

「梁塵秘抄」もしお貸しねがへますならいつでも結構でございますからお送りいたゞければ幸甚に存じます。御手許にございませんなら決しておいそぎ下さいませぬやう。

(昭和十七年十一月十五日付)

東からは間もなく『梁塵秘抄』が送られてきたらしく、十一月二十三日付葉書に

前略 先日「梁塵秘抄」到着いたしました。わざわざ洵に有難うございました。よい歌をノオトしながら大切に拝見いたしてをります。読了の節は早速お返し申上げます。

とある。今回の新出書簡により、この四日後に『梁塵秘抄』を返却していることが明らかになった。依頼から返却まで二週間足らず、三島の精力的な読書の様子が窺われる。なお、前稿でもふれたが、昭和十七年十月二十日付の清水文雄宛書簡に

「文芸文化」十月号では、「近代の悲劇がまことに御立派な文章と存じました。また「華の園」はまだ梁塵秘抄をよんでをりま

せぬ私はいくたびもよみかへして私どもの幼年時代が意外に七百年以上昔の人の幼年時代とある脈絡をもつてゐることを考へ心たのしうございました。

とあって、『文芸文化』第五卷第十号・通巻第五十二号の「古典新生」欄に「華の園」の題で紹介された今様三首が、三島と『梁塵秘抄』の出会いであったといえる(①の書簡によれば、『梁塵秘抄口伝集』はすでに読んでいたらしい)が、『文芸文化』によつて『梁塵秘抄』に興味を持った三島は、一ヶ月ほど後に、東に『梁塵秘抄』を借りたことになる。

本書簡によると、東が『梁塵秘抄』中の、「われをたのめて来ぬ男」の歌について何らかの評価をしたらしく、三島も興味を引かれている。当該今様は、

われを頼めて来ぬ男 角三つ生ひたる鬼になれ さて人に疎まれよ 霜雪霰降る水田の鳥となれ さて足冷たかれ 池の浮草となりねかし と揺りかう揺り揺られ歩け^⑦

というものである。当該今様の歌主(詞章から想定される主体)は遊女であつて、人から疎まれることや足の冷たさ、定めない漂泊の辛さを身をもつて知っているからこそ、このような呪詛の言葉が重ねられているとみるのが通説であるが、三島の「足の冷えるのにも悩んでゐた女であつたかもしれぬ」、「男への呪詛が一さう実感

として浮き出てきます」といった指摘はそうした点を鋭くついでいて、大変興味深い。

後の小説『中世』^③の中には、二十五歳で他界した足利義尚の霊を呼び寄せようとした猿楽師菊若（菊若は義尚の寵愛を受けていた）の様子を「菊若の身は澄みゆく独楽のやうに、と揺りかう揺り、夢みつ、揺られて行つた」と表現している箇所がある。ごく短い引用のため、断定はできないながら、前稿では、「と揺りかう揺り」という印象的な表現が当該今様と関わる可能性を指摘した。本書簡から窺われる当該今様への興味は、その推測を側面から助けるものとなり得るのではないだろうか。

以上、わずかな事例であるが、新出書簡によって、若き日の三島の歌謡愛好の様子をたどってきた。東健の父親は、三島の書簡を二百通近く保存していたといひ^④、とすれば、未だ百通以上が行方不明のままである。その意味では甚だ不完全なものであるが、ひとまず、新出書簡に見える歌謡関係の記述を整理し、散逸した書簡のさらなる発見を待ちたい。

注

- ① 引用は『新潮』第一〇四巻第一号（二〇〇七年一月）による。三島の新出書簡の引用は、以下、同誌による。

② 『決定版 三島由紀夫全集38』（新潮社 二〇〇四年）による。既に紹介されている三島の書簡の引用は、以下、同書による。

③ 『小泉八雲全集 第六巻』（第一書房 一九二六年）の引用に従う。

④ 『日本古典全集 歌謡集 下』（日本古典全集刊行会 一九三四年）により確認。

⑤ 『新日本古典文学大系 源氏物語 一』（岩波書店 一九九三年）による。「源氏物語」の引用は、以下、同書による。

⑥ 『新日本古典文学大系 古今和歌集』（岩波書店 一九八九年）による。

⑦ 『新編日本古典文学全集 神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』（小学館 二〇〇〇年）による。

⑧ 『中世』は、第一部が、『文芸世紀』第七巻第一号（昭和二十年二月）、第三部が『文芸新誌』（『文芸世紀』より改題）第八巻第一号（昭和二十一年一月）に発表された（第二部が掲載されていた『文芸世紀』第七巻第三号は三月十日の東京大空襲により神田の印刷所で焼失）。その後、『人間』第一巻第十二号（昭和二十一年十二月）に全文が掲載された。

⑨ 『決定版 三島由紀夫全集16』（新潮社 二〇〇二年）による。

⑩ 大塚潔「東文彦宛三島由紀夫書簡の謎」（『新潮』第一〇四巻第一号（二〇〇七年一月））。